

## 2011年・乳幼児期の外遊び、どう対応しましたか（福島原発事故を受けて） 調査報告（概要）

世田谷区で35年近く外遊びの子育て活動（遊び場づくり・自主保育）を推進している。2011年3月の福島原発の事故は、このような事故で乳幼児の外遊びが制限されていることに大きな衝撃と痛みを受けている。

では、この事故は、実際に、乳幼児期の外遊びに、どのような影響を与えたのだろうか？子育てママたちは、どのように考え、どう対応しているのか、したのか？区内では乳幼児期の外遊びを推進している団体が多くあるが、その団体はどのように対策を講じているのか？いたのか？など、原発事故が与えた乳幼児の外遊びの影響について調べたく、区内の150人のママと14カ所の外遊び場活動団体にアンケートとヒヤリングを（2012年1月～5月）に実施した。

### 1) 150人のママたちの声からみえた事故の対応と戸惑い

- ・福島原発から250キロ離れている世田谷でも深刻に真剣に放射能の被害とその影響を受け止めていること。
- ・事故直後の3月中に外遊びを中止したり抑制していたりしたママは6割以上に昇り、2012年の春でも天候や風向きなどを気にして遊んでいる方が3割近くいる。
- ・外遊びについては、乳幼児期には欠かせない日常の活動で「禁止することは難しい」と、「悩みながら遊ばせている」「遊ばせていた」ことがわかった。
- ・また、事故については「被害の結果や現状をきちんと把握することが難しく、確かなことがわからない」という中で、自己判断で対応し、対策を講じている。そのために価値観や緊迫観への違いから、話せる人、話せない人の分断があり、この事故の独特の人間模様があること。
- ・事故の直後に一時疎開を行ったり、移住を考えた家族も多く、自主保育などのグループ活動が縮小し、休会していた。しかしこの事故で活動を停止する団体はない。
- ・上記に重ねて、原発について、声を挙げ意見を述べるのは「反社会的」「特別な集団の行動」という見方が従来から強くあるために、放射能についても、気軽に話せなくなっていること。話題にすることだけでも「人間関係がギクシャクするのではないか？」「何も知らない自分が逆に苦しくなるのではない？」と悩んでいるママたちの戸惑いと苦しい心境が現れていた。

### 2) 外遊びの活動団体の声から見えた対応と戸惑い

- ・活動の継続などの判断は中心となる運営メンバーの考えで対応や対策が決まるという側面があった。

- ・放射能について情報を集めるメンバーがいたり、常日頃からメンバーがきちんと話しあえる関係を持っているか否かで、対応や動きに違いがあり、きちんと話しあえている団体は個人の気持や心配事も口にしていて、納得しながら対応を考えていた。
- ・また、原発や放射能には多様な意見や感じ方があり、「子どもの遊び場として強いカラーは出たくない」という地域や利用者への配慮が働き、放射能への対策や勉強会などの活動を団体として積極的に表示し取り組んだところは少なかった。これは行政から事業委託を受けているという団体の立場があり「団体独自の判断や行動だけで動けない」という主催者側のジレンマを生み出していた。

### 3) 小さなコミュニティーの有効性

- ・今回の調査は区内の子育て活動や外遊び活動を推進している団体の協力を得て行った。そのためか、不安の解消や情報の収集に、地域で運営している遊び場や自主保育など、地域性が濃く顔が見えるつながりがとても有効に役立っていた。「メディアは信用できない」という声が多くあり、その代わりに果たしたのが、日ごろの顔が見える活動メンバーたちで、ここで教わることや収集する情報への信頼度は高かった。
- ・また、団体には「どのような環境下でも子どもの遊びは欠かせない、このような災害時だからこそ、子どもや親たちの集まる場をつくりたい」という姿勢が強くあり活動が継続されていた。いつもと変わらない場が存在していたことが地域や利用者に大きな安心を与えていた、とも感じる。

### 4) 事故を通して、ぜひ、伝えたいママたちの声

ママたちは「知ることが怖い」「知って何ができる」など、「事実とむき合いたいがむき合えない」などの矛盾した気持ちも持っている。そして、若ければ若いほど受ける影響は大きいという事実を受け止めている。この親たちの戸惑いや緊張感は社会にきちんと伝わっていない、と強く感じている。子育て者の声は、原発のこれからを決めていく中でもっと話され聞かれ、生かされていくべきと伝えたい。

最後に見えたのは、ママたちの学びである。「自分自身の生き方を問直すきっかけになった」「おかしいと思ったことは“あきらめず”声を挙げることを学んだ」「同じことを考え一緒に行動できるたくさんの仲間に出会えました」という声は、おおきな犠牲を通して得た可能性であり希望である。

### 5) 2012年秋

一年半が過ぎ世田谷では放射能への不安を口にする声は弱まったと感じる。しかし「雨の日は心配」「子どものこれからの健康が気になる」というママたちの声は変わらずにあり、内部被爆の学習会や上映会にはたくさんの参加がある。団体では、「事故当時は公の判断や情報に寄り添うことしか出来なかったが、これからは団体として勉強会

を進めたい。」「このような事故に相談できる専門家とのつながりを育てたい」という声が聞かれる。当調査は「これ」という確かな答は導いてはいないが、250キロ離れている世田谷でもこのような日々があるし、今もある。協力してくれたママたち、団体に感謝し、一日も早く安心して安全な日が送れるようにと祈るばかりだ。

調査 KOPA（外遊びと子育て支援研究会）

調査委員会

- 矢郷恵子 KOPA 代表・新しい保育を考える会代表
- 小西玲子 玉川まちづくりハウス事務局
- 佐谷和江 計画技術研究所（まちづくりコーディネーター）
- 首藤万千子 NPO法人プレーパークせたがや 運営委員

報告書をカンパで配布しています。